

表面は笑顔で、中身は悪魔だった私
～妊娠・育児は、人と関わる専門職としての大切な学び～
修士課程 1 年 三好礼子（看護師 教員）

渡辺晋様

本日の講義を聴きながら、女性のライフイベントと仕事について考えていました。私は約 30 年間病院で看護師、また看護管理者として勤務していました。職場は 20 歳代から 50 歳代と幅広い年齢の看護師が勤務していて、それぞれのライフイベントに合わせながらキャリアを重ねていました。

看護管理者として職場で勤務している時には、看護師達から結婚や夫の転勤で退職、妊娠により勤務形態の変更や休暇、育児休暇明けの職場復帰等、様々なことに対応してきました。看護管理者である私は、妊娠の報告を受けるたびに、半分の自分と一緒に喜び、もう片方の自分はその看護師が産休に入る日を計算し、人員減による業務調整や、夜勤がいつまで可能なのか等を考えていました。

年々、職場の人員配置が厳しくなり、そのような時に妊娠を報告されると表面は笑顔で、中身は悪魔になって人員計算をしていました。そんな自分が本当に嫌になったことがありました。

ある時、育児休暇明けから復帰した看護師の看護場面を見た時に、以前とは違う人としての深みと温かさや余裕のある関わりをしている印象を受けました。産休や育児休暇中にも、様々な経験が人として成長していたのだと思いました。

人と関わる職業に携わっているものとして、この休暇中の経験も必要なことだと思いました。この休暇は病院の中では一時であるけれども、何倍もの力をもって復帰する人もいることを考えると、医療や看護の質の向上につながることもあると思えてきました。それ以来、悪魔だった自分が器の小さいやつだと思うようになりました。

今回の性差別による入試に、女性の妊娠出産のことがあることを改めて認識しました。講義の途中で、この不正入試に関わる方の中に、加点や減点をすることに心が痛む人はいないのだろうか、それとも反論することができない環境なのかと考えていました。

このような人としての倫理に欠けるような大学で学ぶ未来の医師たちが可哀そうに思えてきました。大学入学がゴールではなく、どのような医師を目指していくのか、そのための専門性と人間性の教育を考えてくれていたら、違って

いたのかもしれない。

目先のことにとらわれずにもっと先をみて、教育者としての教育観や倫理観を大切にしておほしかったと、この事件に関わった悪魔達に伝えたいです。

最後に、本日の講義資料を見て、同じテーマの新聞記事を時系列で読むことを初めて体験しました。これまで新聞はその日に読み終えたら、再度読み返すことはしていませんでした。今回は先生から提示されました 1 年にわたる記事を読み、様々な角度でこの事件が続いていることを改めて知りました。一つの事柄を丁寧に掘り下げ広げていくことで、学びが深まると思いました。

大学院生に必要な学びの過程も教えて頂いた気がしました。これから大学院生として学ぶためのいいスタートになりました。本日の講義に感謝しています。